

第30回『教行信証』に学ぶ会 講師：延塚知道先生 【ライブ版】

2024（令和6）年10月3日（木） 会場 円徳寺

講題： 信巻 「三一問答」 信樂釈

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。

この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。

大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の眞実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

え、こんにちは。えー少し秋めいて涼しくなってきましたけども、一週間前までちょうど北海道に行っておりまして、北海道はもう朝晩ストーブ焚いてました。寒くてね、ストーブを焚いてましたけども、帰りに東京で『教行信証』の講義があるので降りましたら、34度でした。（笑）酷暑でね。九州に帰りましたら九州も同じく暑かったですけども、この二、三日少し涼しくなりました。

えー二日ほど前に小倉の駅の裏のリーガロイヤルホテルで、田川の方たちが中心になって、あの、私の「講師」になったことと、「董理院（とうりいん）」という役職に就いたといので、祝賀会をしてくれました。えー、田川の大谷派の寺院は34ヶ寺あるんです。みんな一つになってね、今まで私が擬講論文を取った時から数えると、ちょうど45年ですけども、45年の間に5回ほど、そういう祝賀会をしてくれました。優しいところでね。それが私にとってどれだけ励みになったか、みんな応援してくださってね。まあほんとありがたいことでした。この会からも何人か出席してくださり、またね、大分や久留米や、その辺からもたくさん出席してくださって、ま、大変励みになりました。まあ、頑張っ

いとね。

えー、まあ田畑（正久）先生は、安居、まるで今回で終わりのようにおっしゃってますけども、（笑）あー普通だったら終わりですから、「信巻」でもやろうかなと思ってましたけども、よく考えると、もう1～2回当たりそうだから、（笑）こりゃあ「信巻」なんかやるとると、後困ると思って、「教巻」を、短い、出遇いだけです。しかしあれは、「教が決まれば真宗のすべてが決まる」。ということは、あの「教巻」の中に、実は『教行信証』の全体を見通した親鸞の眼差しがあるんです。ところがそのまま読めないからね。

これまで参考書を見ると、まあそこまで読んでないから、まあ僕は今までやったことがないと思うんですが、今回「教巻」をやろうかなあと思って、田畑先生がお元気やったら出てくださるというから、わしゃもう俄然張り切らなあかんと思うて（笑）。まあその後、「行」「信」、またやりますので（笑）、まあ90ぐらいまでは、曾我さん90ぐらいまでやりましたからね。やれたらいいなと思って、まあ思っております。まあまあ頑張るって勉強しないといけないと、まあ発破をかけられたとこですね。

みなさんはまあ、大学の先生なんかになると、いいなあと思つてるかもしれませんが、祝賀会でも申し上げたんですけど、私は2回ほど辞表を持ってね、学長室に行ったことがあります。「親鸞聖人のお心にかなっていないかもしれん」と。「だから私のような者は、どうも申し訳ないと思うから辞めさせてくれ」と言っつて、2回ほど行きました。えらいこっぴどく怒られまして、えー一人の学長からは、「バカたれっ！」て怒られて、追い返されましたけども、もう一人は、私の先生であった寺川（俊昭）先生が学長の時でしたから、辞表を持って上がりまして、「何を血迷ったことをおっしゃってるんですか。親鸞聖人のお心にかなっていないなんていうことは、みんなそう思っつて、一生懸命、自分の分際を果たしてらんだから、何をバカなことをおっしゃってるんですか」と言っつて怒られて、こんこんと怒られましたけど、私は引かなかつた。「いや、辞めさせてもらいたい」と言っつて引かなかつたら、最後に、「あなたは、大谷大学を辞めたいとおっしゃってますが、あなたが大谷大学であります」と言っつて、びたつと頭下げられた。「学長それはいけません」と、だいぶん申し上げたんですけど、言うたびに「いや、あなたが大谷大学であります」と頭を下げて上げないから、「わかりました」と言っつて、研究室に帰りましたけどもね。研究室に帰ると、松原先生に買っつていただいた本が並んでるでしょ。それ見たらもう、ワーツと涙が出て来て、「まあ、頑張らないかな」と思っつて。

まああ、やっぱりしんどいですよ。その後、寺川先生がまたいつもの通り、学長室から電話がかかっつてきて、「祇園に行きましょう」。参りましたら、「延塚さん、あんたの所のね、田川組は本当に暖かい。ずーつと応援してね、祝賀会を開いてくださっているというじゃありませんか。そういうところに何とて言っつて帰るつもりですか」て怒られましてね。まあ、これは言っつていいかどうかわかりませんが、寺川先生はその時に、「実は私は、広島山の奥の寺から出ましたけれども、大学の教員になつた時から学長になるまで、自分の組は私を一度も呼んでくれていません。冷たい。実に冷たい。私は本当に悲しかったです」と言っつて、先生しみじみおっしゃっつてましてね、「それに比べてあなたは、どれだけ恵まれてると思っつてるんですか。そういうところに何とて言っつて帰るつもりですか」て言っつて、本気でまあ怒られましたね。

「いや、それは先生、出来すぎるからですよ。東大行って、東大の特待生で卒業して帰っつて来て、そら大学の先生になつたら、そらみんな、やっかみでそうなるんですよ。僕みたいになーんも出来が悪かつたら…」、「そんなことありません！」て怒られました（笑）。まあまあ、そんなことありま

した。しかし今は、続けてきてよかったと思いますね。わからないものはわからない身のまんまで、ちゃんと許されていく世界を親鸞聖人は開いてくださった。それが、まあいかにもありがたいと思うことであります。まあ皆さんも、どうか、体に気を付けて、わかってもわからんでもいいんだ。聞いとったら元気になる。それでいい。

今は「三一問答」を皆さんと尋ねています。これはねえ、ここでも申し上げましたように、世親が『大経』の阿弥陀如来に感動してね、「世尊！」と叫ぶわけです。「生きたお釈迦様よ！」と叫ぶんですね。そして、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」、こう言って頭を下げたわけです。「私は、世尊がお説きになった『大経』の阿弥陀如来に、一心に帰命します」。これは信心の表明ですよ。世親の信心の表明ですけれども、「帰命尽十方 無碍光如来」というのは、これはご本尊でしょ。だから、「信心が如来だ、と言っとるわけです。

『大経』以外に、そういう信心が、『大経』の阿弥陀を信じる信心が如来だって言うような經典はありません。だから、なぜ信心が如来なのか、信心が如来だから、「感染の凡夫が信心をおこせば、生死即涅槃と証知する」（「感染凡夫信心発 証知生死即涅槃」）。あるいは「煩惱を断ぜずして涅槃を得る」（「不断煩惱得涅槃」）。こういうことが信心によって起こるのだと、宗祖は「正信偈」でうたってますね。その秘密を、これはまあ「『大経』の秘密、と言ってもいい、お釈迦様の深いお心が『大経』にこもってるけども、そのお心が私達にはわからないから、これは秘密なんだと思います、その秘密を「三一問答」として、まあ公に公開していく仕事、これが親鸞聖人の『教行信証』の、まあ一つの山になります。ですから、「三一問答」、今私たちが学んでいるところ、一番大切なところなんです。いやあ難しいので、なかなか参考書などを読めば、読めば読むほどわからなくなる。一心が三心だということを生懸命証明する、こういうことに始終してるんですが、そうじゃない。一心が三心なんだけども、だからこそ涅槃が開かれるんだと。信心にね。「信心が如来なんだ、と。こんな不思議なことが起こるのは何でか？」と問うてるのが親鸞の「三一問答」の初心ですから、そこを忘れて、一が三だとか、三が一だとかいくら言うても意味がない。そうじゃなくて、「信心に如来の世界がなぜ開かれるのか？」。これを三心をもとにして訪ねて行ってる。

「字訓釈」では、信心一つに収まって、真実の心である。こう言うしかない。ところが「仏意釈」になりますと、それならどうして、「至心」「信楽」「欲生」と、どうしてこういう順番で、阿弥陀は本願を立ててくださったのか？ この順番で、凡夫でも救われる、凡夫の信心に涅槃の覚りを手渡したい。これが実現するために、どうしても「至心・信楽・欲生」と、こういう順番が必要だったんだと。そこに、仏意がある、お釈迦様の仏意があると。だからここは「仏意釈」と、こう言うんですが、この間質問が出てましたように、要するに、理屈を言ってるんじゃないで、如来の大悲の、私はこんな順番で救われたんだと、こんな者が、救われるはずがない者が、こういう形で救われたんだと、だからすべて、仏様の大悲に依るんだと、如来の大悲を推求している、これが「三一問答」の根本に流れている宗祖のお心だと思ってください。

それに対してもう一つ、「化身土巻」に、化身土というのはこの娑婆です。ね、私たちが生きてるこの娑婆で、自力を生きるしかないね、誰もね。ところがその自力を生きる人が、どうして他力に転換していくのか？ それは、お釈迦様が「しっかり頑張んなさい」と、こう言って自力を励ましてくださっている。『観経』に依ってね。私達にはわかりませんが、お釈迦様の目から見れば、人間は、人間にな

った時に、仏様の世界から背いているんだから、いくら努力して頑張っても、嘘を重ねて本当にしようということにしかならん。だから、「頑張れ！」と励ましてくださると、表向きはね。だけど、お釈迦様の大悲は、頑張ったら必ず韋提希のように潰れるから、その時が、「そのままいたら死ぬよ」と、心を巡らして、如来の大悲に目覚めなさいと。回心。それを『観経』と『大経』と、そして回心をした人間でも、自力が抜けない。

家内が亡くなる時に、「私のようなわからない者でも、念仏で助かるの？」と言ってました。「心配するな、助かる」。「ふう〜ん」って言うてました。けど本当に、あんだけ「白血病が嫌だ」とか、「病気が嫌だ」とか、あんだけ「仏様の命に任せられん」と、こう言うったのに、死ぬ二日前には、「ふーん、私白血病なんや」って言うてました。もう白血病の命になりきって、そして抵抗する力もなくて、能力も、力も、自我の力も弱くなると、もともとあった仏様の世界の方が立ち上がって来て、もう仏様のような顔になってね、「ああ仏様の世界に帰っていくから心配するな」って言ったら、「うん」と言うてこうしてました。

ああー『観経』という経典は素晴らしいね。「仏教がわからない人もわかった人も、自力が抜けんだ」と。「だけど最期には仏様の方が迎えに来るから心配するな」と言うてくださると。

まあ『大経』は、それを「今わかれ」という経典ですけども、しかし、わかった人も、その後の念仏生活の中で、凡夫であることを徹底して知らされて、最後には「仏教がわかったことから手を離しなさい」と言って群萌に返していく。ですから、『観経』が実際面、担っているんだと思いますね。

そういうふうに、自力を生きる人間が、この娑婆で助かっていくのは、釈尊の教えによる。釈尊の教えというのは、三経。その「三経一異の問答」、これが『化身土巻』の問答ですね。こちら（『大経』）は阿弥陀如来の大悲。そうですね。阿弥陀如来が、「至心・信楽・欲生」と誓ったんだから、阿弥陀如来の大悲。「化身土巻」は釈尊の大悲。それが根底に流れて、問答があるんだということをよく知っておいて頂きたい。

これはね、よく勉強をいたしますと、法然が、これも前申し上げたかもしれない。法然門下の時に、『観経』では、「一者至誠心、二者深心、三者回向発願心」（東聖典 1 1 2）

と、ちゃんと「一つには」、「二つには」、「三つには」と、こう順序で説かれていく。この順序について善導は註釈をしていってます。けども、最終的に、あの『観経』で、「至誠心・深心・回向発願心」という三つの心は、さっき申しましたように、自力では救われないということを通して、本願の三心に目覚めていくから、だから、この「至誠心釈」と、本願の「三心釈」とは、紙の裏表なんだということは何度も法然門下で法然が親鸞に講義してる。だからこれは「至心」というところは、これは後ろに「一者至誠心」。「信楽」の所では、これ（「二者深心」）が隠れています。それは宗祖の御自釈の言葉の使い方から見るとよくわかります。ね。

それでこの間は、「至心釈」を申し上げた。まず第一に「至心」。こういうことですね。それは実践という面から言うと、この中でみなさん南無阿弥陀仏と頭下げた人がおろうが。ね。その時にまずは、「何と偉そうに生きて来たことか」と。何でもかんでもわかると思うて生きて来たけど、何にもわかってなかったと。しかも偉そうに自分の自我を後ろ盾にしてね、今日まで頑張ってきたけども、今はっきりと仏様の鏡のような真実の心によって、我々は貧・瞋・痴の自力の煩惱を生きるしかない、と、申し訳なかったと、先ず頭を下げる。この「申し訳なかった」というところが、先ず「至心」の大切なところ。私

達にとっては、今言う貧・瞋・痴の煩惱しかないから、生活して行くときにはね。だからそれを超えた真実心になるんだと。こう言って法蔵菩薩が、「至心」というところで真実になってくださった。だから私達の方には、「申し訳なかった」と頭が下がるんだと。そういうことがまず第一に起こるから、「至心釈」のところでは、今申し上げたような内容が丁寧に説かれていました。丁寧に読めばそうなるのよ。僕が解説すると、ね。

225ページ、私の聖典ですと225ページから、ここはもう読んだところですから、と思いますけれども大事なとこだから、ね、復習しますよ。ここに、

仏意測り難し、しかりといえども竊（ひそ）かにこの心を推するに、（西231、島12-68）これは「竊かに以（おもん）みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船」と、あそこ（「総序」）と一緒にだから、自分の信心をよ〜く推究してみると、

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染（えあくわぜん）にして清浄の心なし。虚仮諂偽（こけてんぎ）にして真実の心なし。

ここは、もちろん仏典が、ね、背景にあったとしても、例えば、あっちこち、え〜215ページ、ちょっと指を挟んで215ページちょっと開けて見てください。ここは215ページのこれ、善導大師の「至誠心釈」さ。だから「至誠心釈」が後ろに隠れているよってということなんだけども、ここに、例えばね、今の読んだところから言えば、え〜どこから読みますか、

「一者至誠心」。「至」は真なり。「誠」は実なり。一切衆生の身・口・意業の所修の解行、必ず真実心の中（うち）に作（な）したまえるを須（もち）いることを明かさんと欲（おも）う。

そして、外（ほか）に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐いて、貪瞋邪偽（とんじんじゃぎ）、奸詐百端（かんさもはし）にして、悪性侵（や）め難し、事、蛇蝎に同じ。三業を起こすといえども、名づけて「雑毒の善」とす、また「虚仮の行」と名づく、「真実の業」と名づけざるなり。もしかくのごとき安心・起行を作すは、たとい身心を苦励して、日夜十二時、急に走（もと）め急に作して頭燃を灸（はら）うがごとくするもの、すべて「雑毒の善」と名づく。この雑毒の行を回（めぐら）して、かの仏の浄土に求生（ぐしょう）せんと欲するは、これ必ず不可なり。何をもつてのゆえに、正しくかの阿弥陀仏、因中に菩薩の行を行じたまいし時、乃至一念一刹那も、三業の所修みなこれ真実心の中（うち）に作（な）したまいしに由（よ）ってなり、と。（西216〜217、島12-59）

これさっきの文章と一緒にでしょ。ですから親鸞はこの「至心釈」を註釈するにあたってね、自分が仏様の鏡に照らされて、こっち側には救われる手立ては無い。必ず不可であると。そう決定づけられた。それは私一人じゃなくて善導が言ってるでしょうと。「至誠心」で。それを踏まえて、さっきのような文章を親鸞聖人がお書きになった。よくわかるでしょ。もう一度元に戻りましょう。（225頁へ）

仏意測り難し、しかりといえども竊かにこの心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心になし。虚仮諂偽にして真実の心なし。

ここですね。これは今、善導大師が「至誠心釈」で、はっきりとこちらからの、自力では往生が不可だと。こういう文章をここに持ってきている。そして、「ここをもって」という接続詞によって、

如来、一切苦悩の衆生海を悲憫（ひびん）して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、一念・一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清浄の真心をもって、円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまえり。如来の至心をもって、諸有の

一切煩惱・悪業・邪智の群生海に回施したまえり。すなわちこれ利他の真心を彰（あらわ）す。かるがゆえに、疑蓋雑わることなし。この至心はすなわちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。

わかりますね。もう説明不要でしょ。今の文章も、善導大師のところの文章にちゃんとあるでしょ。それを持って来て、真実なのは「如来の真実に遇う」。これが私達が名号に帰する時の初心だ、一番最初の心だと。だから「南無阿弥陀仏」と頭下げて、「ごめんなさい」と頭下げるのだと。こういうことになります。それが「至心釈」の内容になっているということ。それをよく知って頂きたいと思います。

そしてその後に、この『大経』の「勝行段」が出てきます。「勝行段」というのは、法蔵菩薩の不可思議兆載永劫の修行が説かれているところです。ね。ところが、今日はそこを中心にして、少し話を展開しますが、『大経』の「勝行段」は、親鸞聖人がここに引用しているように、実に短い。ね。短い文章です。ここにありますように、

「ここをもって『大経』に言（のたま）わく、」とあって、ここからが法蔵菩薩のご苦労ですね。そうすると、「欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず、」ここから始まります。

これはすぐわかるでしょ。「三毒五悪段」の私達のあり方は、貪欲・瞋恚・愚痴の煩惱でまみれとる。だから、その煩惱を何とかして超えて行きなさいというのが「三毒五悪段」のお釈迦様の説法ですね。それと同じことを法蔵菩薩が苦労したんだと。「欲覚」、これは貪欲のこと。「瞋覚」、これは瞋恚のこと。それから「害覚」、これは愚痴の煩惱ね。そうすると法蔵菩薩の修行は、この三毒の煩惱を超えたいと、こういうところから修行が始まるとる。そして、「欲想・瞋想・害想を起さず。」とこう言うんですから、貪欲・瞋恚・愚痴の煩惱によって、欲の思い、それから腹が立つ思い、さらに人を害する、そういう思いも起ささない。つまり、私達の煩惱とまったく反対の真実の心で修行なさった。ここから始まる訳ですね。

そして、私がよく申しますように、「色・声・香・味の法に着（じゃく）せず。忍力成就して衆苦を計らず。少欲知足にして」、貪欲の反対、ね。貪欲の私達の反対をどうして表現するかというと、「少欲知足として生きていく」。充分だと。このままで充分なんだと。自体満足ね。それを体現して、「少欲知足にして、染（ぜん）・恚（い）・痴（ち）なし。」貪欲・瞋恚・愚痴の煩惱が一切無い。「三昧常寂にして、智慧無碍なり。虚偽諂曲（こぎてんごく）の心あることなし。」

わかりますね。法蔵菩薩は、「三昧常寂にして」、智慧が無限の智慧を持って、あらゆるものを見抜き、「虚偽諂曲」、邪（よこしま）で偽り、媚（こ）び諂（へつら）う心、そういう心が一つもないと。逆に私達の心を思うてください。すぐに媚び諂う。下げんでもいいのに頭下げる、ね。そういう心が全くない。そして瞋恚、怒りの煩惱に対応して「和顔愛語にして」、和やかなお顔をして、優しい言葉で生きて行きなさい。

「意（こころ）を先にして承問す」。法蔵菩薩は智慧が溢れているから、私達が何を求めているかは、衆生はわかりません、ね。時々仏法を求めて良い心が起こるとるような気もするけど、まあ80パーセントから90パーセントは、ろくなこと考えてない。そして、娑婆でうまいこと生きて行く、工夫して生きて行くぐらいしか考えてない。それで失敗して、ああしもたなと思うし、成功すればやったと思う。けど、そんなこと一生しても結局満ち足りない。だから、私達は心の底から求めているものがわからない。衆生にはね。だから「意を先にして承問す」というのは、法蔵菩薩の方が、私達が何を求めているか、それを見抜いて、そしてそれを和やかな顔をし、優しい言葉で、私達に伝えてくださる。それ

が法蔵菩薩の修行なんだというふうに出て来るわけです。もう、うだうだ言わんでもわかるでしょ。

「勇猛（ゆみょう）精進にして」、たけだかな心で努力して、その願いは少しも止むことがない。「専ら清白（しょうびやく）の法を求めて」、世間のものを超えて、専ら法を求めて、そして、それをあらゆる人に施して、「もって群生を恵利しき。三宝を恭敬し師長に奉事（ぶじ）しき」。南無阿弥陀仏と頭を下げて、ね。それをあらゆる人に伝えて行く。「大莊嚴をもって」、私達の救いは浄土にあるということを示して、私達の「衆行（しゅぎょう）を具足して」、私達の行を、南無阿弥陀仏の行、そこに大莊嚴、浄土の覚りを込めて、「もろもろの衆生をして功德成就せしむ」。一切の衆生をその南無阿弥陀仏一つで救いたい。このご苦労が、実は『大経』の「勝行段」の法蔵菩薩のご苦労であると、こういうふうに関聖人は、『大経』の「勝行段」をここに持って来ているわけですね。

ところが、この「勝行段」は法蔵菩薩のご苦労だからね、道理として言えば、至心にも「勝行段」が関係しているけども、信樂にも欲生にも全部関係しているはずやね。ところが親鸞聖人、これ至心のところにだけ「勝行段」を引いて来てね、ここに、「勝行段」を引いて来て、ここ（信樂、欲生）は引いてないのよ。そうやね。確かにこれを読めばね、貪欲・瞋恚・愚痴の煩惱でまみれてる衆生を救うためにね、貪欲・瞋恚・愚痴を超えた真実の心で修行したんだと。だから、名号にそれを込め、『大経』の浄土をそこに封じ込めて、私達のところに与えるから、南無阿弥陀仏が届いた時には、「ごめんなさい」と、貪欲・瞋恚・愚痴がどんだけ申し訳なかったかと、こちら側に起こる。これは良くわかる。良くわかるんだけど、「兆載永劫の修行」と言うには、この貪欲・瞋恚・愚痴を超えるということ、それだけしか「勝行段」には説かれてないわけです、『大経』では。

元に戻って見てみますか。「勝行段」、『大経』の。27ページ、ここに親鸞聖人が引用しているところ、27ページのところね。2行目からね、（西26～、島1-24～）

不可思議の兆載永劫において、菩薩の無量の徳行を積植して、欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず。欲想・瞋想・害想を起さず。色・声・香・味・触（そく）・法に着（じゃく）せず。忍力成就して衆苦（しゅく）を計らず。少欲知足にして、染（ぜん）・恚（い）・痴なし。三昧常寂にして、智慧無碍なり。虚偽・諂曲の心（しん）あることなし。和顔愛語にして、云々とあつて、
三宝を恭敬し、師長に奉事す。大莊嚴をもって衆行を具足し、もろもろの衆生をして功德を成就せしむ。

ここまで引用しているわけです。ね。そしてその後は、

空・無相・無願の法に住して、つまり、覚りに立って、

作なく起なし。法は化のごとしと観ず。僞言（そごん）の自害と彼此（ひし）俱（とも）に害するを遠離（おんり）して、善語の自利・利人と人我兼利（にんがけんり）するを修習しき。国を棄（す）て王を損（す）てて、財色を絶ち去（さ）け、自ら六波羅蜜を行じ、人を教えて行ぜしむ。無央数劫（むおうしゅこう）に功を積み徳を累（かさ）ねて、云々。

ここまでの「勝行段」です。そうすると親鸞聖人が引用したその後は、要するに、法に立ってね、その法を我も他人もなく、ちゃんと人に伝え得るように、永遠の昔からずっと修行しとると。そして、貪・瞋・痴を超えた修行だから、これはお釈迦様と一緒にやね。国を棄て王位を損て財色を絶ち、この娑婆のもの全て棄てて、そして、自ら六波羅蜜の行を兆載永劫に修行してる。これが法蔵菩薩の修行なんだと。

ここまで『大経』に書かれているということになります。そこを良く知っといってくださいね。逆に言えば、『大経』にはそれしか説かれていないということになります。ですから、親鸞聖人は『大経』の「勝行段」を「至心釈」にあててる。ここに持って来てる。ここはどうなってるのか。今の所、何も書いてないね。そこが、長年ね、私が解けなかった問題なんです。ね、この『大経』の「勝行段」というのはいかにも短い。そして内容は貪欲・瞋恚・愚痴を超える真実の心で修行したんだ、兆載永劫（ちょうさいようごう）に修行したんだと、これが説かれてるだけでね、これえ、うーん、そうなんですな。

なぜ私がそういうことを言うかという、今度は「信楽釈」に移りましょう。今日は「信楽釈」ですから、こっから今、えー『大経』の「勝行段」があって、その後は『如来会』の「勝行段」です。『如来会』の「勝行段」でもほぼ同じ内容になってます。そしてその後、『涅槃経』が引かれてくる。そして、227頁、（西234、島12-70）

「次に信楽というは、」というふうに、今度は信楽に移っていく。ね。「至心釈」だいたいわかりましたね。くどいようですが、念仏に帰した、念仏に頭が下がるというときには、「申し訳なかった」と懺悔が起こる。その懺悔の内容が法蔵菩薩が真実心をもって修行したからね、真実の心で、貪欲・瞋恚・愚痴を超えてる心で修行してるから、私達には頭が下がったときに、「貪欲・瞋恚・愚痴の身であった」。はっきり自分の身に目覚めて、「ごめんなさい」。これが「至心」。そうですね。その次に「信楽」というところに移っていきます。

次に「信楽」というは、すなわちこれ如来の満足大悲・円融無碍の信心海なり。このゆえに疑蓋間雑（ぎがいけんそう）あることなし、かるがゆえに「信楽」と名づく。

これわかりますかね。「すなわちこれ如来の満足大悲」、如来がこの信楽によって大悲を満足させる。それは「円融無碍の信心海」というんだから、「円融」というのは立派なものだけじゃなくて凡夫も包んで、ね、真実でないものぜーんぶを包んだおおきな信心の海によって、私達を包んでくださる。信楽というのはそういうはたらきをするんだと。だから疑いの蓋が交わることがない。「かるがゆえに「信楽」と名づく」とあって、

すなわち利他回向の至心をもって、信楽の体とするなり。

先ほど「ごめんなさい」と懺悔したわけですから、その懺悔をもって「信楽」が始まるんですと。こういうことです。懺悔の身に今度は「信楽」という新しい展開が起こるんですと。こういう意味ね。そこに、

しかるに無始より已来（このかた）、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪（しゅくりん）に繫縛（けいばく）せられて、清浄の信楽なし。これは私たちの姿ですね。

そして、法爾（ほうに）として真実の信楽なし。これきつい言葉でしょ。私たちの方には永遠の昔から人間の方に信心なんてありえないと。「法爾として」ちゅんですから、仏法の「法」としても、真実の信楽はないんだとはっきりこう言ってる。

ここをもって無上功德、値遇（ちぐう）しがたく、最勝の浄信、獲得（ぎやくとく）しがたし。

この「がたし」という字は下の方に漢字で、こういう字が書かれてるね。「叵」（東聖典228頁下段3行目、島12-71）。これは、可能の「可」という字の反対なんだ。だから不可能という意味。ね、そういう漢字なんです。だからここは人間の方に真実の信心などありえない、そして法としても、法に照らしても人間には真実の信楽なんかない。「ここをもって無上功德、値遇しがたく、最勝の浄信、獲

得しがたし。」つまり信心なんて獲得することが不可能である。こういう意味です。そして、一切凡小、一切時の中に、貪愛（とんあい）の心常によく善心を汚し、瞋憎（しんぞう）の心常によく法財を焼く。

真実の信心なんて起こることが不可能だから、色々言ってみても、いつも貪愛の心が常に私たちの全身を汚し、腹立てんでもいいことに腹を立てて、しょーもないことを喧嘩してずっとこだわるとる。

「瞋憎の心常によく法財を焼く。」それによって仏法をだめにしとると。

急作急修（きゅうさきゅうしゅう）して頭燃（ずねん）を灸（はら）うがごとくすれども、わかりますね。髪の毛に火がついたから、慌ててわあ一言うて、こう払う。そういうふうにして頭を払うようにしてても、すべて一生懸命本人は努力してるつもりなんや。自分は自分なりに努力しとって、髪の毛についた火を一生懸命手で消そう思って、わあ一言うて努力しとるつもりなんやけど、全部「雑毒・雑種の善」。すべて貪欲と瞋恚と愚痴に汚されているために、すべて「雑毒・雑種の善」と名づく。また、「虚仮・諂偽（てんぎ）の行」と名づく。「真実の業（ごう）」と名づけざるなり。この虚仮・雑毒の善をもって、無量光明土に生まれんと欲する、これ必ず不可なり。

もう全面否定です。人間の全否定。私たちは否定されるとまあ確かにそやけど、けど、なんかやっぱりこうやって仏教聞きに来とんのやから、いい心もあるじゃねえかとちょっと言いたい。うん。それも「雑毒の善」。そんな心で仏教を求めても仏教がわかるわけがない。不可である。こう言っとるわけです。これはきついですよね。

親鸞という人は、これはもう完全に救いの放棄。救いを求めてね、仏教に志したんだ。誰もそうや。ところが最後の最後になって、「人間の方からの救いはない」とはっきりわかったと。「至心」のときに頭を下げたように、貪・瞋・痴の煩惱にまみれて、死ぬまで抜けんのだと。だから信心なんて言っただけで、そんなものは都合のいいね、気持ちを信心だと思い込んでるんであって、人間の方からは信心など何も無いとはっきり「至心」でいただきましたと。ここの文章も実は「至誠心」のところ、「至心」のところにある文章をそのまま持ってきとる。不可である。ここまでいいですね。

ところが、「至心釈」の時には接続詞がね、ここをもって如来（東聖典225）と、こうなるとるわけよ。私たちの衆生の方から言えば「雑毒・雑種の善」、煩惱に汚れていると。「ここをもって如来」が「一切苦悩の衆生海を悲憫（ひびん）して」というふうには、実に相対的に私たちの貪・瞋・痴の煩惱に対して、法蔵菩薩は貪・瞋・痴の煩惱を超えた心で修行したんだと、実に平面的に相対的に書かれているから、「ここをもって」という接続詞はそのままよくわかる。

ところが「信楽釈」になると、「不可」とこう言っというて、

何をもってのゆえに と変な接続詞なんですね。「何をもってのゆえに」、「どうしてか」というと、こういう意味やね。私たちは不可であると。どうしてかというて、

正しく如来、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、乃至一念・一刹那も疑蓋雑わることなきに由ってなり。

どうしてかというて、法蔵菩薩が兆載永劫の修行をするときに、一刹那も、ひと思いも、疑い、私たちのような煩惱に交わることがないからである。

この心はずなわち如来の大悲心なるがゆえに、必ず報土の正定の因と成る。

この信心は、人間の方の起こした信心は全部浄土に生まれられないけれども、この法蔵菩薩の信心は「必ず

報土の正定の因と成る」。

如来、苦惱の群生海（ぐんじょうかい）を悲憐（ひれん）して、無碍広大の淨信清らかな信心をもって諸有海（しゅうかい）に回施（えせ）したまえり。

如来の清らかな信心を私達一人ひとりに与えてくださったんだと。

これを「利他真実の信心」と名づく。と。こういうふうに書かれていますね。

ところがさっき私がみなさんと一緒に読んだ「勝行段」では、信心を回向するなんてなかったね。六波羅蜜の修行を永遠にした言うだけで、信心を回向するとか、そんなとこ一切なかったやろ。ところがここになると、そうじゃなくて、信心、如来が身を捨てたんだと。私達一人ひとりの、助けようと思うてね、兆載永劫に修行したけど、もう不可能だということがわかったと。（笑）もうあんた達もうあかんと。どんだけ助けようとしても、結局、貪・瞋・痴の煩惱でしか聞かんから、仏教聞いてもなんかこう、名利のために、俺はわかった言うて偉そうにしたりとか、あるいは僕のように金にする。最近よ一けくれる（もらう）ようになった。（笑）金にする。ほれから名利、金、そんなことに変わっていつて、人間の世界では、ちゃんとした浄土に生まれる心には一切ならない。これ、救いようがないっつちゃうことよ。だから法蔵菩薩は、これどうにもならんて、救いようがないと思うたんやね。だから、親鸞のこの言葉から言うと、救いようがないから私の身をあなたたちの命として捨てると。一人ひとりの命の中にね。そして、私が他力の信心になるんだと。そうやって私たちに信心を回向して下さるとるんだと。ここまで書いてるわけです、親鸞は。そんなことどこに書いとんのやって話やけど、ここまで書いてるわけですよ。

こういうことがね、『大經』にはないところなんだね。『大經』にはつぶさに説かれていないところなんだけどもね、親鸞が今言ったような形で、この他力の信心、一番信心が大事なとこでしょ。そうすると、信心なんかない、そらそうや、「邪見憍慢悪衆生 信樂受持甚以難 難中之難無過斯」（「正信偈」東205）、信心を起こすことが一番難しいと。「邪見憍慢悪衆生」だから、信心なんて不可能なんだと、ここでははっきり不可能だと。法爾として不可能だということは、永遠に人間には真実がないと。だから私が身を捨てて他力の信心になる。その信心を「淨信」と、「回向した淨信」と言うんだと。こういうことが書かれてるわけですね。あー、これがね、私長いこと、うん、いや、そうに違いない、そうに違いないけど、ここだけだったらこれ、宗祖のやっぱり感想というか読み込みというか、そういうことになっていくからね。この根拠はどこにあるのかなあと考えて、色々悩み読んでおりました。

実はね、『教行信証』の「証卷」に往相回向が終わるでしょ、そうすると還相回向の記述がながーく引用される。ここは一体何なんだというぐらい長い。還相回向ね。そこをちょっと開けてみてください。最初は285ページのところです（西313、島12-122）。往相回向が終わりましたから、『浄土論』の「出第五門」の文章が出てくる。『浄土論』の「出第五門」ってわかるね。浄土からこの世に出て来て、衆生を教化するところ、それが「還相の菩薩、だからね。だから、その文章から『論註』の還相が出て来て、その後「不虛作住持功德」が出てきます。ここはもう何度かこれまで私が申し上げましたが、浄土に生まれて、ね、そして阿弥陀仏にまみえるということです。そうやね。ところが「七地沈空の難」の菩薩は全ての煩惱を捨てた、貪・瞋・痴を捨てたちゅうわけや。ところが最後に、どうしても仏になりたいという心と、一切の衆生を救いたい、「上求菩提・下化衆生」という菩提心、それが残ると。「七地沈空」までくると、それが実は煩惱なんだと言われるわけです。ね。それが

煩惱なんだと言われたら、それを捨てたら菩薩でなくなるし、菩薩であろうとすると、どうしても作心が残る。だから、ここで「七地沈空の菩薩」は、この作心という菩提心が煩惱だというそういう自己矛盾に陥って、どうしていいかわからんようになる。そのときに阿弥陀の本願に出遇うんだと。そして、自力の菩提心が阿弥陀の本願力に転換して、阿弥陀の本願力を生きる者になって菩薩道が完成していくんです。こういうことが「不虛住持功德」のところに説かれているところです。ここは大事なことなのよ。ね。今のところは大事なことなのよ。

そして、今言ったように阿弥陀に遇って、阿弥陀の本願を生きる者になったんだから、今度は本当の「七地沈空」を超えた八地以上の菩薩になって、菩薩道と言えば自利が完成して、今度は利他の菩薩として、利他行を実現するために浄土から外に出て来て、あらゆる人を救っていく。それを還相の菩薩、浄土から還相して来て、そして教化をしていくと。そういう還相の菩薩がなが—く説かれていくんですね。

申し上げていることわかりますか？ わかるね。要するに、世親の『浄土論』は菩薩道を完成させるために書かれた。そして、いつも私が申し上げるように、『大経』は菩薩道の経典として読むことができる。そうすると、この利他行を、一番最後の利他行がね、菩薩道の最終的目標になるわけよ。自利をして利他をするという、自利利他が円満して菩薩なんだから。だから最終的な目標は阿弥陀の浄土に遇って、阿弥陀の本願を生きる者になって、利他行が完成されると。だから、浄土から還って来てたくさんの人を教化していくと。これが菩薩の利他行であるという意味で、還相の菩薩の利他行がここからずっと説かれていくわけです。

ところが親鸞はそこは、自分が菩薩になって利他行をすると読んでないからね。だから、この還相の菩薩というのをどう読むかというのは、これはなかなか難しいところで、もうはっきり申します、今のように菩薩道として読んだら、自分が還相の菩薩になって教化をする、こうよ。凡夫の場合は、浄土から来た人いうたらお釈迦さんと法然上人と、自分の先生、貪・瞋・痴の煩惱があんまり深い、私たちは、この深い煩惱は阿弥陀の智慧でしか見抜けんから、だから、

如来の智慧海は、深広(じんこう)にして涯底(がいてい)なし。(『大経』巻下・東50、西47、島1-44) こう説かれてね、「東方偈」(「往觀偈」)のところに説かれますよね。だからそういう智慧を讃えて、お釈迦様、法然が出て来てくださって、そして私たちに貪・瞋・痴の煩惱を見抜いて、いずれの行もおよびがたき身(『歎異抄』第二章、東627、西833、島23-2)

と教えて、本願に生きる者にひっくり返してくださる。だから親鸞の場合は凡夫として読むから、そこはお釈迦様とか法然、善知識の根源的なはたらきを説いてるんだと、こう読んだところだと思われま。それは間違いないわけね。

ところが僕はこの、ここがね、難しいから、正直に申し上げまして、僕は『浄土論註』で博士論文を書いた。ところが今のところがなかなか難しい。読むのがね。表向きには還相の菩薩。しかしその「還相の菩薩」を親鸞は「釈尊と法然」と、こう読んだんだと。自分が還相の菩薩になるなんて読んでない。そこまではいい。いいんだけど、実にややこしいんだ、ここ。それではっきり申しますと、博士論文を書いた時には、ここにあんまり触れなかった。うん。触れるとボロが出るから(笑)。けど大切なことだということはわかってたんだけどね、触れなかったんです。くわしくね。ところがみなさんご存知のように(延塚先生が)小樽で10年『論註』を講義したでしょ。そうすると『論註』で言うと、ここは

重要なところになるわけですよ。ここは一体何なんだと思ひながら。今言ったことはわかる、「還相の菩薩」として説いとんだから還相の菩薩なんだと。言葉の解釈はわかる。そして親鸞は凡夫だから、これは釈尊の根源的な意味だと、これもわかる。しかし、何なんだ何なんだと思ひながら読んでいまして、途中で仏さんが降りてきた。雷のごとく。ここは、法蔵菩薩のご苦勞が説かれてるんです。ね。それがわかった。僕は途中で感動してね、もう、講義できなくなって、うわあ〜と涙が出て来て、ほいで途中でうわあ〜と僕が泣き出すもんだからみんなびっくりして、何や何やっちなもんで、ああ、しばらく休憩して、その講義をさせてもらいましたけども。

ここは、実は、還相の菩薩というのは、「わかった」というところから、仏さんのところから出発してるでしょ。それは「従果向因（じゅうかこういん）の菩薩」なのよ。わかるね。果の覚りから菩薩になって衆生を救おうと苦勞なさってる。その従果向因の菩薩ということになると、これ法蔵菩薩でしょ。そうすると仏さまの覚りから降りて来て、そしてここ読んだらわかるけど、「障菩提門（しょうぼだいもん）」から始まるのよね。「障菩提門」ってわかる？ 菩提をさまたげる、それを超えていく菩薩。けどさあ、そもそも阿弥陀に遇って、阿弥陀の本願を生きる者になった時に煩惱を超えたんだから、何でこれ「障菩提門」なんかから始まるのか、それがまたわからなかったわけよ。ところがこの「障菩提門」をよく読むと、いい？ この（『論註』の引用について）、こっから長いことずっと「不虛作住持功德」があって、そして「不虛作住持功德」の浄土から「菩薩四種莊嚴」、菩薩になって、『浄土論註』で言うと四種類の菩薩になって教化に出て行くということが書かれるから、「菩薩四種莊嚴」と言うんやけど、阿弥陀から、阿弥陀の本願によって菩薩になって、そして、ここにおるだけで一遍に世界中に出るとか、それから一瞬のうちに世界中に出て行くとか、色んな不思議なことがいっぱい説かれるんだけど、そういう菩薩になって教化に出て行く。「菩薩莊嚴」として説かれるね。『論註』勉強した人はわかるね？

そしてその「菩薩莊嚴」の後に、今度はさっき言った「障菩提門」というのが293ページ、終わりから6行目のところに「障菩提門」というのがあるろう？ こっからね、今言った「還相の菩薩の修行」というか、苦しみが始まるわけよ。これはどんなことかというね、

「菩薩、かくのごとき、善く回向成就したまえるを知れば、すなわちよく三種の菩提門（ぼだいもん）相違の法を遠離（おんり）するなり。（西327、島12-130）」

三種類の菩提、覚りを障たげる心から遠ざかっていく、その修行をしたと、こういうわけやね。その時に、何等か三種。何の三つかというと、

一つには智慧門に依りて自樂（じらく）を求めず、我心、自身に貪着（とんじゃく）するを遠離せるがゆえに」

ここに印を付けてください。自身に貪着する心を離れる。ね。智慧によって自身に貪着する心を離れるってというのは、これは貪欲と反対の心やろ。そやんね。そして今度は、

「二つには慈悲門に依れり。一切衆生の苦を抜いて、無安衆生心を遠離せるがゆえに」（論）

衆生を安心させない心から離れなさい。うん。安心させない心。つまり喧嘩する心よ。こんなややこしい言葉を使うからみなさんもう眠とおなってこうが？（笑）な？これな、具体的に言うとな、これ衆生が安心できない心ちゅうのは、腹立てて喧嘩する心やあ。そういうことや。ご主人が怒ったら、なんか家庭中おかしゅうなるうが。あれあれあれ、それや。そういう心を遠離する。だから二番目に、無安衆生心を遠離せり と一番最後のところにあるわけよ。だからこれは、貪欲と瞋恚の心を超えると、こ

う書かれてる。そして、

「三つには方便門に依れり。一切衆生を憐愍（れんみん）したまう心（すべての人をあわれむ心）なり。自身を供養し恭敬（くぎょう）する心を遠離せるがゆえに」（論）

何故かという、自分を供養し恭敬するちゅうのはわかる？ いつも自分を立てる根性、それから離れていくんだと。それ（いつも自分を立てる根性）が愚痴の一番、根本煩惱のはたらきやろうが？ 自分を立てる。最後にはね。わかりますね。テレビのワイドショーなんかでも最初はいつでもお前、嘘ついて「私はそんなことしてません」って嘘つくやんか、みんな。ええ？嘘ついてなんとかして逃れようとするけど、文春はそうはいかんわ。ちゃんと調べとるからな。（会場笑）二の段、次の三の段が出てくるからさ。段々だんだん詰めていかれると結局、最初は自分を守ろうと思って嘘ついてるけど、段々だんだん責められて最後にはごめんなさい言わなしゃあないようになってくる。最初からごめんなさい言うわけやな。それが言えない。人間は。自分をいつも守って立てる。

それが愚痴の姿だから、よく考えるとここは、貪・瞋・痴の愚痴と反対の心、それで修行したということから始まるわけ。そうするとこれは、よく考えると、さっき読んだ「勝行段」の最初のところに当たるわけやな。そしてその次に「順菩提門」。これは反対に菩提の門に順じていく心。これが説かれていきます。

続けてていい？眠たい？大丈夫？ 一回休まなあかん時間なんやけど。（田畑先生「時間がちょうど1時間」）ね。ちょっと休もうか。鋭気を養って。少なくとも「順菩提門」ぐらいまでは続けてください。それなら一回休憩しましょう。

会場より：「従果向因」の「向」の字は「降りる」という字じゃないんですか？

先生：ん？「おりる」ってどんな字や？

会場より：「降誕会（ごうたんえ）の降」

先生：知らんけど、「果より因に向かう」菩薩を法蔵菩薩と言うんだ。うん。字はこれ（向）でいい。

「従果向因」の字はこれや。間違っただけやな？（田畑先生「いいです」）いいですよ。いや最近あの、よう指摘してくれた。僕最近ポケきてっからね。「果より因に向かう菩薩」。それ（スマホ画像を指して）は間違うとる。もしネットに出てたらこれ間違ってる。ネットは何の責任もないからね。それじゃあ、ちょっと鋭気を養ってください。（休憩）

補足：

従果向因（じゅうかこういん）：従因向果に対する語。従果降因ともいう。さとりを開いたものが衆生救済のために様々な形を示して現れるように、果位より因位に向かうこと。

（『浄土真宗辞典』編纂 浄土真宗本願寺派総合研究所 教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉

発行 本願寺出版社 2017年11月1日 第5刷発行）

講義 2

私が今申し上げようとしていることはおわかり頂けると思いますが、『大経』の「勝行段」にはない法蔵菩薩のご苦勞を親鸞聖人は『論註』から読み取った。はっきり言えばね。今の「還相回向の菩薩」のご苦勞、そこにこの「障菩提門」からはじまって「順菩提門」ね、そしてそれが終わりますと、「障菩提門」と「順菩提門」の三つの心、295ページになるんですが、これややこしいからね、眠たくなると思いますが。これ大学院の学生でも眠たくなるんだ。意味がよくわからないからね。だけどこれ意味がわかったら大したことないんだから。腹立てる心とか、そんなこと言っとるんだから内容は。漢文で書いとるからややこしいんですね。で、ここに、295ページの終わりから6行目のところ、

「さきに無染清浄心（むぜんしょうじょうしん）・安清浄心（あんしょうじょうしん）・樂清浄心（らくしょうじょうしん）を説きつ。この三種の心は略して一処にして妙樂勝真心（みょうらくしょうしんしん）を成就したまえりと、（西330、島12-132）

つまり、これまで「障菩提門」、そして「順菩提門」。「順菩提門」で大切なのは、「無染清浄心・安清浄心・樂清浄心」、この三つなんだとこうやってきた。ところがここで、この三種の心は一処にまとめて「妙樂勝真心」を成就する。こういうふうに出て来る。だから今までのご苦勞は、この「妙樂勝真心」というところに集約された。こういうことになります。

知るべし」（論）とのたまえり。樂に三種あり。一には外樂（げらく）、謂わく五識所生（ごしきしよしょう）の樂なり。二には内樂（ないらく）、謂わく初禪（しよぜん）・二禪・三禪の意識所生の樂なり。

「外樂」というのは、私たちの体の外側の樂だから、ね、五つあると。「内樂」というのはこれ、精神的な樂だから、「初禪・二禪・三禪」というようなことが書かれている。

三つには法樂（ほうがく）（中略）、謂わく智慧所生（ちえしよしょう）の樂なり。この智慧所生の樂は、仏の功德を愛するより起これり。これは遠離我心（おんりがしん）と、遠離無安衆生心（おんりむあんしゅじょうしん）と、遠離自供養心（おんりじくようしん）と、

これは、さっき言うた「障菩提門」の心ね。この三つの心と、この三種の心、清浄に増進して、略して妙樂勝真心とす。と。

要するに「障菩提門」の三つの心と「順菩提門」の三つの心が「妙樂勝真心」一つに結実するんだと。こういうことになります。そして、

妙の言はそれ好なり。「妙樂勝真心」の「妙」というのは、すぐれている、これは法です。ね。それから、

この樂は仏を縁じて生ずるをもつてのゆえに。

「この樂」、法の樂。だから仏が縁になって「生ずるをもつてのゆえに」。「信仏の因縁」だ。言いたいのはな。仏が縁になって生ずる。

補足：

信仏の因縁：仏を信ずるといふ因縁、あるいは仏の因縁を信ずること。『往生論註』上巻：西・『浄土真宗聖典七祖篇』47頁、『教行信証』「行巻」・東聖典168頁、西155頁、島12-16頁

それから、勝の言は三界の中の樂に勝出せり。

「勝過三界道（しょうがさんがいどう）」（『浄土論』東聖典135）の「勝」。わかるね。だからここは『論註』をよく勉強したらすぐわかるだろ。仏を縁にするっていうのはこれ、「信仏の因縁をもって」（『論註』引文：東聖典168）。それから「勝」、これは「清浄功德」、「勝過三界道」の「勝」や。な。そして

眞の言は虚偽（こぎ）ならず、顛倒（てんどう）せざるなり。

これは「眞実功德」のところに出来るんや。だからこの「妙楽勝眞心」と「障菩提門」も「順菩提門」も最終的にはこの「妙楽勝眞心」一つに結実して、そしてそれは、私たちからすると「信仏の因縁」として実現するんだと、こういうことが言われてるわけです。

もうちょっと言います。あのね、法蔵菩薩は、さっき言うた「障菩提門」から始まって「順菩提門」を修行して、一切の衆生を助けようとして修行したさ。ところがさっき言うた、不可である。人間は。いくら貪欲・瞋恚・愚痴の反対の心で修行しても、聞く方はその心で聞くんだから、ね。いくら超えた超えた言うてみても、聞く方がその心で聞くんだから、これはもう不可である。救いはないというわけやね。だからどうしたかということ、まあ、「妙楽勝眞心」に自分になるというのは、だからあんたたちの信心はないから、私が他力の信心（＝眞心）になりますと言っとるわけ。で、なります言ってみても、みなさんと別のところで私が他力の信心になるなる言うても、通じへんから、だから法蔵菩薩は、私があんたたちのいのちに身を捨てるちゅうわけや。（会場：「は一ん」）、「は一一ん」言うて、いまごろ「は一」言うるとる（会場笑）。な？ 「私があなたのいのちに身を捨てて、そして最後には他力の信心として、私があなたを救うんだ」というのが「妙楽勝眞心」なんです。わかるね。

ここまで読んで僕は感動したんさ。「嗚呼～！」っていう、自分のような信心が起こらない者を、身を捨てて「私が信心になる」とここまで言うてくれて、これ、「親鸞これよろこんだんだ」思うたらさ、もう「うわあー」と溢れるように涙が出て来てさあ、もう感動して感動してどうにもならなかったけど、そういうことなのさ。（会場：「南無阿弥陀仏！」）人間はどんだけ言うても、仏教がわからんから、「貪欲・瞋恚・愚痴を超えた心で修行した！」言うてみても、聞く心がそうだからどうにもならん。だから最後には「私があなたたちのいのちになります」と。そして、最終的に「私が信心になって、あんたたちの涅槃の覚りを手渡すんだ」と。だから三界の道を超えて、そして「信仏の因縁としてあんたたちの中に身を捨てるんだ」と、こう言うて、最終的に「妙楽勝眞心」になると。ここまで法蔵菩薩の苦勞が説かれていくわけです。

ここに、なるほど『大経』の「勝行段」にはないところ、ね、「勝行段」は貪欲・瞋恚・愚痴の反対の心で、六波羅蜜の行で修行したなと書いてるだけです。ところが、ここまできるとこれは、「勝行段」に説かれているわけじゃないわけです。しかし、これ本当なわけですよ。だから、親鸞はものすごこれに感動したね。表向きには還相回向の菩薩の修行なんだけれども、しかしよく読むと従果向因の菩薩。果の覚りから降りて来て、一切の人を救おうとしたご苦勞なんだと。ところが最後には、もう不可能だから、「私があなた達のいのちになる」と。そして、「最後に他力の信心になって、あんたたちを救うんだ」と宣言しているわけですよ。ここが『大経』には説かれていないところなんです。

だから曇鸞偉いでしょう？ これどんだけねえ、悪いことしとるか。な！ この人はやっぱりもう業を尽くしとるさ。ね。そして仏教で救われたいと思うて聞けどさあ、もう業を尽くして悪いことばかりして、どうにもならんと。そのどうにもならん者をどうして救うか？（法蔵菩薩が）俺の命になっ

「なんだ！」と言っとるわけですよ、曇鸞が。「(法蔵菩薩が)「信仏の因縁」となって、俺の命となって、最後には南無阿弥陀仏と声を上げたんだ！」と。「これが嬉しんだ！」と言っとるわけですよ。

ここまでくると、『大経』の「勝行段」にはないところだと思う。そして、「曇鸞偉い！ よ〜うここまで書いてくれた」と、親鸞はこれに感動するんや。ここからこの還相の菩薩、表向きには還相の菩薩。しかし、根源的に言えば、これは「法蔵菩薩のご苦労なんだ」と。そしてこの「妙楽勝真心」は、もうあんまり時間が無いけど、やがて「五念門」の行を開くんだと出てくる。ね！ そして「五念門」は必ず「五功德門」を開くんだと。「かの五功德門、をね。だから、「五念門」に依って自利利他が成就してね、「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」(『浄土論』：真聖全一277、東聖典・145、「行巻」194)、菩提心、その覚りが、信心と「五念門」のところに覚りが開かれてくるんだということが、この後ずっと説かれてくる。説かれてくるよ。この後開いてごらん。296ページ。ここに「願事成就」のところね。ここに、

「かくのごとき菩薩は智慧心・方便心・無障心(むしょうしん)・勝真心(しょうしんしん)をもって、よく清浄仏国土に生ぜしめたまえりと、知るべし(論)(西331、島12-133)

「勝真心」一つに、ここは「智慧・方便・無障心」これ全部合わせて最終的に「勝真心」一つになると言ったんですね。この「勝真心」に依って、われわれを「清浄仏国土に生ぜしめたまえりと、知るべし」とあって、そしてそれは、これ読むと長いから、その3行か4行後に、身業(しんごう)とは礼拝なり。口業(くごう)とは讃嘆なり。意業とは作願(さがん)なり。智業(ちごう)とは観察なり。方便智業とは回向なり。

というふうに、「礼拝・讃嘆・作願・観察・回向」の「五念門」を「勝真心」が開いて来るんだと。この五種の業和合せり、すなわちこれ往生浄土の法門に随順して、自在の業成就したまえりと、言(のたま)えりと。

とあって、その次「利行満足」章になると、この

「また五種の門ありて、漸次(ぜんじ)に五種の功德を成就したまえりと、とあって、「近門(ごんもん)」「大会衆門(だいえしゅうもん)」「宅門(たくもん)」「園林遊戯地門(おんりんゆげじもん)」という、因の「五念門」と果の「五功德門」を開いてくる。そしてこの果の「五功德門」は、最終的に浄土を開き、そして浄土の覚りを私達に与えてくださる。だから、法蔵菩薩の修行が、ここでは「五念門」と「五功德門」、それに依って私達に「涅槃の覚り」を、あるいは「阿耨多羅三藐三菩提」、「空の覚り」を私達に身をもって与えてくださる。こういうことが、この『論註』の今のところにずーっと説かれている。説明するとわかるでしょ？ わからん人は、まあ、自分で勉強してもわかりにくいな。(笑)あおう、あーあー、その内わかるわかる。(笑)わからんでもいいんだ。(笑)けどそうなんだ。だから僕は、曇鸞という人は偉い人だと思う。よほど業を尽くして、ね、この世の辛酸な業を舐め尽くしてね、「俺に馬鹿なこと言うな！」「俺に救いなんかねえぞ！」と言っとるわけで、「俺に救いなんかあるか！」と、「救いがあるのは法蔵菩薩が俺の“信心”になってくれとるからや」と。こう言っとるわけですよ。これ一、凄いことでしょ？ こういうことを曇鸞が丁寧に説いてくださった。そこに親鸞は法蔵菩薩のご苦労を読み取った。ここまでいいですね？

だから、「信楽釈」に帰りましょう。あっちこっちごめんね。「信楽釈」に帰りますよ。ここに、今度はゆっくり読むから、よーく聞きながら、今のことを考えながらよく聞いてください。

(会場：「何ページですか?」)227ページ。

しかるに無始より已来（このかた）、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛（けばく）せられて、清浄の信樂なし。法爾として真実の信樂なし。ここをもって無上功德、値遇しがたく、最勝の浄信、獲得（ぎやくとく）しがたし。一切凡小、一切時の中に、貪愛の心常によく善心を汚し、瞋憎（しんぞう）の心常によく法財を焼く。急作急修（きゅうさきゅうしゆ）して頭燃（ずねん）を灸（はら）うがごとくすれども、すべて「雑毒（ぞうどく）・雑修（ざっしゆ）の善」と名づく。また、「虚仮・諂偽（てんぎ）の行」と名づく。「真実の業」と名づけざるなり。この虚仮・雑毒の善をもって、無量光明土に生まれんと欲する、これ必ず不可なり。

いいですね？ ここまでは、衆生が救われない理由が述べられている。そういうことですね。

そして、「何をもってのゆえに、」という訳のわからん接続詞があって、その次に、今度は法蔵菩薩が説かれて来ますね。ここ読みますよ。

正（まさ）しく如来、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修（しよしゆう）、乃至一念・一刹那も疑蓋（ぎがい）雑（まじ）わることなきに由ってなり。この心はすなわち如来の大悲心なるがゆえに、必ず報土の正定（しょうじょう）の因と成る。如来、苦惱の群生海（ぐんじょうかい）を悲憐（ひれん）して、無碍広大の浄信をもって、諸有海（しょうかい）に回施（えせ）したまへり。これを「利他真実の信心」と名づく。

とあってね、ここに、「法蔵菩薩が身を捨てて、回向の信心にまでなって私を救ったんだ」と書かれてるね。そうすると、これは、こっち側（「何をもってのゆえに」の前。「～必ず不可なり」）は、衆生が救われない理由。こっち側（「何をもってのゆえに」の後。「如来の大悲心」、法蔵菩薩）は、衆生が救われる理由。こうなっています。救われない理由と、救われる理由とが一緒なんや。

「こっち側には信心が無い。だから救われないんだ。だから法蔵菩薩が身を捨てたんだ。」というふうには、救われない理由と、法蔵菩薩が身を捨てた理由が一緒だから、だから、救われない理由と、救われる理由が一つになって説かれるから、ここの文章は難しい。それはさっき言ったように、曇鸞のあの文章ね、私がね、言うてもわからんから、あなた達の深いところに身を捨てて、命の深いところから「我が名を称えよ」と、「我が国に帰れ」と呼び続けて、やがて時期が来て、そうか！とわかった時に、他力の信心として名告りをあげると。それによって救われるんだと。だから、救われない理由と、救われる理由と一つになってる。ここに、『大経』の秘密が隠されてるわけです。わかりますね？

だから曾我（量深）さん、ややこしいこと言うとなんだ。何か、救われる理由と救われない理由が一つになって、「何をもってのゆえに」という、ここで繋がってるのは、うだ うだ うだ うだ うだ うだ うだ 訳のわからんこと言ってます。要するに、さっき言ったような、親鸞の背景に、曇鸞のあの文章があるっちゅうこと。命を捨てたんだ。香田さんの命の中に法蔵菩薩が命を捨ててるんだ。だから、来となくとも「やっぱり行こうかな」と思おうが？

「もうひよっとしたら死ぬかもしれん、やっぱり聞いとこう」と思うて来うが？ それは、香田さんがここに来るっちゅうことよりももっと深く、ひよっとしたら法蔵菩薩が促しとるんだ。ああ、死ぬ時わかる、死ぬ時。（笑）「そうや！今迄ずうっと聞法して来たんは、法蔵菩薩の促しやったんや」と。ああ、わかる時が来るから。うん。まだしっかりしとるからな。（笑）もうちょっとボケたらな、わかるようになるから。（笑）な！「あー法蔵菩薩の命やった！」っていうことがわかるようになるから、うん。（笑）その時に、初めから法蔵菩薩の促しでね、生かされて来たんだということがよおうわかる。うん。

そこに、『大経』のお釈迦様の説く説法、素晴らしいと思わんか？ 法蔵菩薩が命を捨ててる。

だからあんたたちが仏法を聞く、最初から。それは僕がいつも言うように、法話で言うとしたら、自我が生まれる前の三年間位はね、これは仏様の世界を生きとったんやと。自我が生まれて急に私を中心にというふうになって、仏様の世界を忘れたんや。この自我の方が弱って来たらさあ、仏様の世界の方が事実なんだから。それが立ち上がって来て、そして法蔵菩薩に生かされて来た。南無阿弥陀仏。もうこれしかなくなって来る。

(会場：香田さん：「わかります。はい。」)(爆笑)(香田さん：「わかるちゅうとおかしいな。」) いやいや、わかっと思う。ちょっと涙ぐんだから。(爆笑) それでいいんだ！ うん。

君らわからんでも、何かこう、感動したり、わかったような気がしたり、何か、嬉しい、元気になったりしようが？ それは私が喋りかけてる、一生懸命喋りかけるところに法蔵菩薩がちゃんと応えようとしとるんだ。だからまた来うと思おうが？ うん、まあいいや。(笑) あんまり言うとな、あんまり言うとな、何かわしゃあ何か教祖みたいになるからな、言わんけどな。まあそうやと思うよ。うん。と言うように、「信樂釈」のところに、「なぜ救われるか？」と言うとね、救われない理由。「お手上げだ。だから法蔵菩薩が身を捨てた。」と書いてる、あの曇鸞のあそこがね、素晴らしいわけですよ。そして、「他力の信心によって、私ははっきりと“不可、”ということがわかる」と。信心に立ってね、はっきりと「人間の自力は不可だ」ということがわかるんだというふうにちゃんと押さえて、そして、「この信心こそ、浄土の正因である」と。法蔵菩薩なんだから、こういうふうに言ってる。そこに、「至心信樂」のところで、なぜ如来が私になってくださったのか？ その構造をきちっと説いてくださってるのが、「至心信樂」のところだと思います。

だから、この後直ぐに、もうあまり時間が無いから進みませんが、第十八願(成就文)の、ね、

「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん！」(手で机を叩く)松原(祐善)さんここでいつも手叩いとった、こうやって。(手で机を叩く)「一念せん！」これが、「至心信樂」のところに半分だけ説かれている。信心の成就の文(「本願信心の願成就の文」と説かれている。

(東聖典228)だから今「至心信樂」のところで、私達を救う法蔵菩薩が名告り出た。「至心に回向したまえり」(固く結んだ手を突き上げる)。いつも松原さんこうしとった。何やその手はと思ってたけど(笑)これは新しい主体が生まれたんやと言いたかったんやと思う。「至心に回向したまえり」。(また手を突き上げる)こう言ってね、いつもこう言っとった。

そして、「かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得て不退転に住せん。」と言って堂々と、その後の半分は、「欲生心釈」の後ろに持ってきてる。ね。(東聖典233)そして「本願成就文」を「信心成就の文」と「欲生心成就の文」(「本願の欲生心成就の文」)に二つに分けるのはここだけです。「三一問答」だけね。だから「至心信樂」の前の二つのところで、信心が成就すると親鸞は押さえてることになる。後の「欲生心釈」のところは、またこの次にしましょう。今日あまりしゃべると、ね、よくないから。

それで、もう少し補足しましょう。今申し上げたことわかってもらえましたね？(会場：「はい」)そして、曇鸞のあそこが大切だと言うことがわかってもらえましたね？(会場：「はい」)だから親鸞は、

『入出二門偈』で、461ページ。これは宗祖の『入出二門偈』という大変大事な著作なんですけど、そこに、うん、461ページね。(西546、島15-2)「かの如来の本願力を観ずるに、凡愚遇(もう

お)うて」、これいいねえ。本当は無いんだよ、この「凡愚」ちゅうのは。

「観仏本願力 遇無空過者」(『浄土論』東聖典137)でしょ？ ところがここは親鸞は、「凡愚遇うて」。これ本当は、「七地沈空」を超えた「八地」の菩薩が本願に遇うということなんやからね、本当はね。ところがここに、

かの如来の本願力を観ずるに、凡愚遇うて空しく過ぐる者なし。一心に専念すれば速やかに、真実功德の大宝海を満足せしむ。菩薩は五種の門を入出して、自利利他の行、成就したまえり。

とあって、この次から、法蔵菩薩の修行が説かれます。

不可思議兆載劫に、漸次に五種の門を成就したまえり。そして、

何等(なんら)をか名づけて五念門とすると。 あって、

礼と讚と作願と観察と回(え)となり。 というふうに、法蔵菩薩の修行は『大経』の「勝行段」では六波羅蜜の行でした。ところが親鸞は、『入出二門偈』で、「六波羅蜜の行」を「五念門の行」に変えてしまってる。これ知っと思ってくださいね。それは、さっきの「妙楽勝真心」の後、この他力の信心は、「五念門」を開いて、「五功德門」を開いて、この信心に涅槃を手渡したんだと、こういうあそこを良く読まれてね、そして、兆歳永劫の修行は、「五念門」なんだと。こういうふうに、宗祖は書いておられるわけです。

これ本当はあかんよね。経典変えたらあかんやろ？ あかんでしょ？ 反則やで！ だからこれ反則やろと前からずっと思っていました。何でこんな反則すんねんと。つまり、読み替えぐらいだったらまだいいわ。「至心回向」を「至心に回向したまえり」と読み替えるぐらいなら、字変えてないんだからね。ところが、内容がさ、「六波羅蜜の行」を「五念門の行」なんだと変えてしまうということは、お釈迦様の経典を変えてるということになるよ。だからそんな馬鹿なことあるか！と思ってたけども、半分はそう思ったけど、半分はこういうふうに言うということは、『論』『論註』から『大経』を読み返しているんだと、いうふうに僕は思っていました。けど、それはその通りな訳です。さっき言った、あの還相回向のときの修行をね、六波羅蜜の修行が、実は「五念門」なんだと曇鸞が押さえてるから。そして、『大経』には無い一番要になるところ、つまり身を捨てて、自分が他力の信心にまでなって、回施するということまでね、曇鸞が書いてくださるとる。そこが『大経』の信心の要だから。だから「六波羅蜜の行」を、親鸞は今言った「五念門の行」と読み替えたのだと思います。

これ本当は反則だと思うけども、親鸞にとっては、それほど嬉しかった。つまり、お釈迦様の「勝行段」の意味を、本当の意味で、私達にちゃんと手渡して下さったのは曇鸞大師なんだと。そこから読んだらね、「六波羅蜜の行ではなくて五念門の行なんだ」と言って、まあ宗祖は感動して、涙と共に書いたんだと思う。そういうふうに、宗祖が読んだのは、曇鸞のさっきの文章に依るからだ、というふうに思います。

そこまでいいですかね？ そしてそこに、なぜ信心に涅槃の覚りが開かれるかという根拠がある。法蔵菩薩の信心が、私の信心だから。法蔵菩薩というのは、これは仏さんだからね。仏さんが私の信心になってくれとるんだから。だから世親は「帰命尽十方 無碍光如来」(『浄土論』東聖典135)と言ったんだと。こういうふうに、宗祖が説いてくださってるところだというふうに思います。

どうですか？ 「南無阿弥陀仏」って頭を下げて、ああ～この愚かな者を、馬鹿だと思って「南無阿弥陀仏」と頭を下げて、気が付いてみると、「ああ～元々あった、大きな一如の信心海の中に生かされ